憧れのお姉さんは
バニーガール
The beloved beauty is a bunny girl
Naori・R・Sirpitoen 21 years old University student
Affiliation is "Lupus Paradisum" Part-time job
First Bunny Girl
ナオリ・R・サーピトゥエン
現役女子大生、アルバイトでバニーガール。
穏やか系お姉さんの美巨乳に男たちはもう夢中！

僕の住む街に『ルプス・パラディズム』ができて、ナオリさんと出会えて
退屈なだけだった僕の日常は本当に色鮮やかに輝きだしたんだ。

ただ時間が過ぎるままに、無為な毎日を繰り返していただけの僕の生活は
張りのある生き生きとしたモノに変わっていった。

セクシーなバニーガールのお姉さんたちをいつでも見られるし
ナオリさんが働いている日は会いに行くのが楽しみで楽しみで仕方がなかった。
こんな充実した日々がいつまでも続いて欲しいと、本気で願っていたんだ。

でも、しばらくすると…僕は生まれて初めての苦しみに悩まされることになってしまう。

ナオリさんに対する自分の性欲を自覚したせいで……。

（あぁ、ナオリさんやっと見えた…！ 今日も綺麗だなぁナオリさ～ん）

『ルプス・パラディズム』の一階正面は開放的なファストフードコーナーだ。
隣接した広場もお店の一部
オープンカフェのようになっていて今日もお客さんたちでにぎわっていた。

ナオリさんは主にこのファストフードコーナーで働いていることが多い。
ここのバニーガールのお姉さんたちはまさにお店の顔、看板娘的な存在なんだ。

僕もついこの間まではあの賑わいの中にいられたんだけど
今は広場にも入らず
少し離れた物陰から携帯端末のカメラのズームを使って覗き見ることしかできないでいた。

（ナオリさんのおっぱい…やっぱり凄いなぁ、歩くだけでタプタプ揺れてる。
　ぐ、偶然を装って軽くタッチするくらいできたかも……なのに、僕は）

あの頃、初めてナオリさんに会った頃は間近で見られたんだ。
本当についこの間なんだけど、その時僕はまだただの[redacted]だったから。

（お尻も良いなぁ。Ｔバックがくい込んでむっちりとしたお尻のお肉がプルンって。
　ストッキング越しだけど丸見えだよナオリさん。
　触ってみたい……撫でまわして、ほおずりしちゃったり……！）

『う……っ、くぅぅ……』

ナオリさんの身体を見ているだけで
僕の頭の中ではイヤらしい妄想が繰り広げられる。
そして、男の本能は僕の意思に関係なく身体のある部分を変化させるんだ。

股間のアレに血液が集まって硬く大きくなり始めた。
窮屈なズボンを押し上げて、ドクドクと脈動している。

僕はナオリさんの身体に…おっぱいやお尻に興奮し
性欲をたかぶらせ男のモノを勃起させてしまっていた。

『ナ、ナオリさん……っ』

これが僕の苦悩だった。
ナオリさんへの性欲を自覚したあの日から
遠くからナオリさんを見ただけで
股間のモノがすぐに勃起してしまうのを抑えられないんだ。

もし今の僕がナオリさんに近づいたら…あのおっぱいを間近で見てしまったら
もっと大きくしてしまうかもしれない。
それどころかその場で射精してしまうかも……。

そんなことナオリさんに気づかれたら、絶対に嫌われる…軽蔑される。
だから僕は、もう長いことナオリさんに近づくこともできないでいたんだ。

欲望に悶々としながら、きわどいハイレグ姿を隠れて凝視する日々。
この状況、完全に満たされることの無い性欲は僕の中によどんで溜まりに溜まっていた。

その時、新しいお客さんがやってきた。
ナオリさんと同い年ぐらいの２人組……なんだか嫌な感じのする男性客だ。
ニヤニヤとした下品な笑みを浮かべて
バニーガールのお姉さんたちへの下心を隠そうともしない。

そんな男でもお客はお客だ。
ナオリさんが変わらぬ笑顔で２人組を接客するために近づいていく。

『あ……っ!?』

突然のことで僕も自分の目を疑った。

男たちはナオリさんと少し会話をすると
いきなり一方の男がなれなれしく彼女の肩に手を回して抱き寄せたんだ。

ナンパ…!? なんて強引な……。
もう一人の男も無遠慮にナオリさんの腰に指をはわせる。
指使いが凄くいかがわしい。

ナオリさんは嫌がって抵抗しているけど
男２人が相手じゃ力の差がありすぎて手を振りほどけないみたいだ。
周りのお客さんたちも驚くばかりで、状況に反応できないでいた。

あ、あいつら……！ ていうか男たちの手がナオリさんの身体を這いあがっていく。
まさか、いやそうに違いない。
あいつらナオリさんのおっぱいを……！

ナオリさんの身体が僕以外の男に触られてる、このままじゃおっぱいまで揉まれちゃう……！

そんなこと許せない、許せるもんか！
ナオリさんは僕の……ナオリさんの身体は僕だけの……！

僕はナオリさんを守りたい一心で……いや
自分の性欲だけを正当化する身勝手な感情で、隠れていた物陰から飛び出した……瞬間。

『ルプス・パラディズム』のセキュリティの人たちが駆けつけ
無礼な男たちを取り押さえていた。

しかも最初に駆け付けたのは金髪ツインテールのバニーガールのお姉さんだった。
優雅さを感じるほど綺麗な回し蹴りで男たちをノックアウトしてしまった。

ナオリさんはホッとした表情で金髪のお姉さんと親しげに会話している。
当然だけど、僕の出番はなかったわけだ……。

ただ、股間のモノはこれまでにないほど勃起してしまっている。
抵抗して嫌がるナオリさんの表情が僕の脳裏に焼き付いて離れない。

自分に湧き上がるこれまでにない暗い欲望が恐ろしくなり
僕は逃げるようにその場を離れたんだ。

家に帰り部屋にこもった僕は電気もつけずにベッドに突っ伏していた。
さっきの光景が頭から離れてくれなくて
どうしようもなく…苦しい。

僕の頭の中にはナオリさんのいつもの優しい笑顔と
初めて見た苦悶の表情が交互に浮かぶ。

ナオリさんもあんな顔するんだ……。
憧れのお姉さんの嫌がっている表情を見られて、なぜか満たされていく自分に驚いた。

ナオリさん……僕は……っ。

目をギュッと閉じてもナオリさんのエッチな身体が消えることは無かった。
遠くで見ることしかできないあの大きなおっぱい。

あいつら、あんな強引にナオリさんのおっぱいを触ろうとしたんだ…！

くそ……僕だって、触りたいのに。
も、揉んでみたいのに……！

どんな感触なのかな、きっと柔らかいんだろうなぁ。
まぁるいお尻も、ふとももにだって…僕も抱き付いて撫でまわしてみたい。
もっと…もっとエッチなことだってやってみたい！

ナオリさんに対してこんなイヤらしい妄想するなんて、自分は最低な奴だと思ってた。

でも、僕だけじゃなかったんだ。
ナオリさんたちバニーガールのお姉さんに対していかがわしい欲望を抱いているのは。

ナオリさんの身体に触れていたあの男たちの手。
あれが、僕の手だったら……。

ナオリさん…嫌がっても触っちゃうぞぉ…！

あぁ……なんてことを想像してるんだ僕は。
でも、いけない妄想に股間は反応してガチガチになってしまってる。

ベッドの下に腕を突っ込むと隠し持っているナオリさんの写真を取り出した。

僕が撮影した――もちろん、無断で隠し撮りしたやつなんだけど……。
顔が写ってるのもあるけど、ほとんどはおっぱいやお尻
ハイレグのくい込んだ部分のアップだ。

いつもみたいにこれを見ながら射精しちゃえばそれで満足……できるのか、僕？

ナオリさんに触ったあいつら……。
最低だけど、性欲のまま実際に行動を起こしたんだ。
ムリヤリにでも、せめて一度だけでも、あのおっぱいを揉みまくりたくて。

僕も、妄想していることを現実に出来ればとずっと思ってた。
どうせなら…ナオリさんに僕のを握ってもらって射精させてもらいたいし。
いや…そこまでいかなくても……
せめて、本物のナオリさんを間近で見ながら射精したい…！

……もう一度ベッドの下に腕を入れると、手探りであるモノを取り出した。

ガラスの小瓶。

中には僕の変わり者の友人が作った液状の薬が入っている。

僕の唯一の才能とコレを使えば、ナオリさんを……。

ずっと考えていたことだ。
両親がそろって泊りがけで出かけているこのタイミングがチャンスだと。
まぁ、やっぱり怖くて決断できないと思っていたんけど。

他の誰かがナオリさんを狙ってる光景を目の当たりにしてしまった。
僕は、決断しないわけにはいかなかった。
ナオリさんを僕だけのモノにするために……！

身なりを整えるのもそこそこに、適当な荷物をバッグに詰め込むと
少し震える手で小瓶を握りしめながら、僕は夕日が沈みかけた街に飛び出した。

夜が始まりかけたこの時間でも、街ははまだ昼間のような明かりに包まれている。

ここは海運が盛んな港湾都市だ。
様々な物資だけじゃなく、いつでも人の出入りが多くて
他の港からやってきた船乗りたち相手のお店がおそくまで営業しているのだ。

最近では『ルプス・パラディズム』目当てにやってくる観光の人たちも多いらしい。

そのため街の中心の商業エリアは様々な年代の人たちであふれている。
おかげで僕みたいな[redacted]が夜に一人で出歩いていても不審に思われることもなかった。

息を切らせて僕は走る。
驚くほど心臓の鼓動が激しいのはもちろん全力疾走だけが原因じゃない。

通りの先に『ルプス・パラディズム』が見えてきた。
ライトアップされひときわ明るく輝いている。

もうすぐだ、ナオリさん…ナオリさん……！

足を止めれば覚悟が揺らいでしまう気がする。
けど、このまま飛び込んだら変に目立っちゃうかも。
あぁでも、よく見ればお客さんの出入りはまだまだ多い……これなら紛れ込めそうだ。

僕は多少速度を落としながらも走ったままファストフードコーナーの中に飛び込んだ。
まばゆい照明に一瞬目がくらみ
大げさだけど夢の楽園に足を踏み入れたみたいな感じだった。

「いらっしゃいませ、ルプス・パラディズムへようこそー♪」

お姉さんたちの明るい声が響き渡る。
興奮とともに懐かしさがこみ上げてきた。
ナオリさんへの性欲を自覚してしまったあの時以来、お店の中には一度も入ってないんだった。

ナ、ナオリさ……ぅあ!?

一刻も早くナオリさんに会いたくて、周囲を見渡した僕の目に飛び込んで来たのは……

おっぱい…お尻、太もも！ お尻っ、おっぱい！ ふとももっっ、おっぱい!! おっぱい!!

『ッ……!?』

僕は慌ててバッグで股間を隠した。
こんな、あっという間に大きくなっちゃうなんて!?
ナオリさんのことばかり考えてて、他の女の人のことを完全に忘れていた。
ここにいるお姉さんたちはみんなバニーガールのコスチュームを着ているんだった。

どこを見ても、おっぱい…揺れるおっぱい！
くねるお尻ぃ！　や、やばいってぇ……!!

なかにはナオリさんよりもおっぱいの大きい人までいる。
す、凄い…ゆさゆさしてる……！

大げさじゃなかった！　ここは本当に夢の楽園だ…！

ここでようやく気付いた、今店内にいるお客さんってほとんど男の人じゃないか。
平然とした顔をしてメニューを選んだり、食事を楽しんでるように見えるけど
今の僕にはしっかりと下心が感じられる。

僕もみんなと同じで……みんなも僕と同じように
イヤらしい目でお姉さんたちを見てるんだ。

と、とにかく…ナオリさんを探さないと……。

「あれ？　あなた、もしかして……」

ッ!?　この声は…！
僕は勢いよく振り向いて…目前の大迫力おっぱいに釘付けになった。
アレにドクドクと血が集中してグググッと大きくなる、隠すバッグに力を込めた。

「あぁ、やっぱりそうだ〇〇君♪　久しぶりだね」

ナオリさんだ！
あのナオリさんが、あのナオリさんのおっぱいが目の前に…！

同学年の中では背が低い方の僕と、高いヒールのブーツをはいたナオリさんが並ぶと
ちょうど僕の頭の高さにおっぱいが…！

な、なんてラッキー……いや、いやいや！

ダメだ…胸ばっか見てちゃ！　[redacted]のくせにやらしい奴だって思われる……。

「どうかしたの〇〇君？ 私の胸に何か――――――」

『あっ…ち、違！ 違うんです、何でもなくて…！
　えっと……お、お久しぶりです、ナオリさん』

「うん。前はクラスの子たちと一緒に良く会いに来てくれてたのに
　急に〇〇君だけ来なくなったから、ちょっと心配してたんだよ。でも良かった、元気そうで」

あぁ、ナオリさんが僕のことを心配してくれてたなんて…！
ていうか名前まで覚えてくれてたんだ。感動です、ヤバいです…これだけで満足かも。

やっぱり綺麗だなぁ。いつぶりだろう？ こんな間近で見るナオリさんの優しい笑顔は。
こんな良い人に対して、イヤらしいことをしたい一心でここに来たなんて……僕は。

でも、ナオリさんから漂うかすかに甘い香りは僕の善良な思考をマヒさせていく。
こんな良い人だから…優しいナオリさんだからこそ
僕の中に溜まった欲望を、性欲をぶちまけたい……！

「それにしても今日はどうしたの？ 顔を見せに来てくれただけじゃなさそうだけど？」

『えっと…それは……ぁあ!?』

「ん？ どうかした？」

ナオリさんは少し身をかがめて僕に顔を寄せてくた。
あぁ唇が、近い。目を合わせられない。

でも目をそらせばそこにあるのは……かがんでくれたおかげで谷間の強調されたおっぱいだ。
もうこの場でナオリさんに抱き付いて
あの谷間に顔をうずめてしまいたい…そんな衝動を必死に抑えた。

『いえ、あの…実はその……
　今日はナオリさんにお願いがあって…急で申し訳ないんですけど……』

「お願い？ うん。私にできることだったら何でもしてあげたいけど…どんなこと？」

『は、はい……その――――――――――』

僕は手のひらの中にあるあの小瓶を改めてギュッと握り直すと
ナオリさんにお願いをした。

この時のためにずっと考えていた、ウソのお願いを。

「それにしても災難だったね～〇〇君。家に入れないのって焦っちゃうもんねぇ」

『は、はい…！　それはもう、鍵を無くすなんてこと初めてだったんで。
　よりによってこんなタイミングだったし……』

「ご両親、湾向こうの半島まで行っちゃったんじゃすぐに帰って来られないもんね。
　今度新型の高速フェリーが完成するっていうけど、それでも半島までまだ丸一日かかるんだって」

『そ、そうなんですか……やっぱり、まだ大変ですよね』

僕はナオリさんの後に続いて『ルプス・パラディズム』の奥へと続く廊下を歩いていた。
今までだったらこうして他愛のない話ができるだけでも嬉しくてたまらなかったけど
正直、会話は上の空だった。

「でも〇〇君、ラッキーだったよ。宿泊室ね今日はまだ結構空いてるんだ。
　普段ならこの時間でもいっぱいになっちゃうことが多いんだけどね」

『そ、それは良かったです……あぁ、いいなぁ～。はぁ、はぁ……』

前を歩くナオリさんの、お尻。
Ｔバックでエロさが強調されむっちりしたお尻に僕は夢中になっていた。
歩きに合わせてくいくいっと動き、柔らかに形を変えるお尻のお肉。

あぁ…！　股間のモノをこすり付けてみたい……！
僕の頭の中ではこれまで考えたことの無かったレベルの妄想が繰り広げられていた。

…と、ナオリさんが歩みを止めこちらに振り返るとプルンとおっぱいがひと揺れする。
お尻から慌てて上げた視線が、今度は胸に吸い寄せられそうになるのを我慢した。

「ここが〇〇君に使ってもらう宿泊室だよ。
　そんな広くないし、凄く良いベッドってわけじゃないけど。
　個室だし、我慢してね。あ、今回のことは特別サービスだからね他の人には内緒だよ」

『は、はい…！　ホント、ありがとうございます！　助かります…！』

「ふふふ……じゃあどうぞ入って」

事前の下調べ通り『ルプス・パラディズム』には宿泊室が存在していた。
お酒を飲みすぎて眠ってしまったお客さんのための、いわゆる仮眠室……。

僕はナオリさんと一緒に個室に入る……シンプルで掃除の行き届いた部屋だった。

「ん～っと…備品があるかチェックしとかないと」

ナオリさんは僕に背を向けて、備品…タオルや歯ブラシなんかがそろっているか確認している。

僕の考えたウソのお願いはとても簡単なことだった。
両親が出かけている留守の家に帰ると、いつも持ち歩いているはずスペアのカギが無くて
家に入ることが出来なくなってしまった。
『ルプス・パラディズム』に仮眠室でもあったら使わせてもらえませんか？

というお願い。
ウソは鍵を無くしたってところと事前に宿泊室があることを知っていたってこと。
ナオリさんは少しだけ思案した後すぐお願いを聞き入れてくれて、部屋にまで連れて来てくれたのだ。

「うん、全部そろってるわね。あとは…もし夜中何か困ったことがあったら私たちはいないけど
　当直のガードさんがいるからその人に言って。優しい人だし話は通しておくから大丈夫よ」

『はい…っ。わかり、ました……っ』

個室にナオリさんと２人きり…。
僕みたいな[redacted]相手ならまだしも、例えば昼間の男みたいのが酔っぱらってしまえば
そういうやつともこうやって部屋まで来て２人っきりなったりすることがあるのかな……。

ゴクリと喉を鳴らし……
改めてばれないようにナオリさんの顔からつま先までを舐めるように見る。

酔いに任せた男に襲われちゃったり……しないのかな…？

チャンスをうかがっている人は絶対いるはず。
あんな強引のじゃなくてもっと虎視眈々と狙っているような男が。
他の誰かに襲われちゃう前に…僕が……ナオリさんを！

「それじゃあ〇〇君、私はもう少し仕事があるから……」

ナオリさんがドアノブに手をかけた。

やるぞ…！ このタイミングを逃したら……！

あの小瓶はスプレー式に薬を吹きかける仕組みになってる。
心臓が口から飛び出しそうなほど高鳴る……震えるな、指。震えないで。

「あ、そうだ。〇〇君夕ご飯はもう食べたの？ まだだったら、この後一緒に――――――」

嬉しい誘い。

でも、ごめんなさい…！ 僕は、僕はもう我慢できない……!!

足を、踏み出す。

ナオリさんまでわずか２～３歩。

無言で近づいて、右腕を突き出し……

念じながら。

「どうしたの？」という表情のナオリさんの顔に向かって
小瓶の中身を吹き付けた。

「んん……ッ!?」

とっさに目をつぶり、口を閉じて顔を背けたナオリさん。

あ……!?

もしこれが何の効果もないただの水か何かだったら。
そんな不安が頭をよぎった瞬間……

ナオリさんはすぐに立っていられなくなり、ドアにもたれかかりながら座り込んでしまった。

す、凄い……！
これ、本当に本物だったのか！

「こいつはな、俺が練りに練った神秘力を濃縮具現化させた即効性の眠り薬なんだぜ。
あ？ ただの眠り薬かよ……だと？

せっかくおまえの分も作ってやったってのにな～、いらないっか～～」

『んっ～～～…しょ……！ ぅんん～～っ!! っはぁ！ はぁ…はぁ……』

女の人には失礼かもしれないけど、人間の身体の重さを思い知らされた。

僕は薬の効果で深い眠りに落ちたナオリさんをベッドの脇まで引っ張って運ぶと
渾身の力で抱き上げて、なんとかベッドの上へ…横に寝かせることに成功した。

凄いや…これだけ強引に動かしても全然起きそうにない。
効果抜群だな、この薬。

ガラスの小瓶の中にはまだ少し液体が残ってる。
これは貴重だ、慎重に使わないと。

ベッドのわきにある机に小瓶をそっと置くと
僕は大きく深呼吸してからナオリさんを見下ろした。

穏やかな寝息ですやすやと眠る憧れのお姉さんは、今や完全に無防備状態だ。
コスチュームのおかげもあってか
ほとんど垂れてないおっぱいが呼吸に合わせて上下に動く。

震える指先でチョン…っとおっぱいをつついてみた。

プルンとはずむ胸。
さ、触れた……！

なんだか夢の中にいるみたいだった僕をその感触が現実へと引き戻す。

僕は……この身体を…ナオリさんのこのおっぱいを今から好きに出来るんだ……！
これまでにないほど大きく硬くなった股間のモノが喜びと興奮でドクンと脈打った気がした。

「眠りの効果は……まぁ個人差もあるが、短くても２時間ってところだ。
　その間はよっぽどのことをしない限り起きやしないぜ、変な副作用もないから安心しな。
　とはいえ、お前の憧れのお姉さんには使えないだろうけどなぁ……くくく」

いや、使えるんだよ。僕ならできるんだ。

熱くもないのに乱暴に上着を脱ぎすて、ズボンをパンツごとずり下げる。
信じられないほど勃起したアレが窮屈さから解放されると、余計な思考や感情も消え去っていく。

ナオリさん…！ ナオリさんのエッチな身体でこの欲望を…僕の性欲を受け止めて!!

全裸になった僕は四つん這いの体勢でナオリさんの上にゆっくりと覆いかぶさった。

当然、いきなりベッドに飛び込んで
抱き付いておっぱいにむしゃぶりつきたかったんだけど……。

勃起したのが少しでもナオリさんの身体に触れれば、それだけで暴発しちゃいそうだったんで。

あぁ…ナオリさんの顔がこんな近くに……。

まさに目と鼻の先だ。
クラスの同級生どころかうちの学校に通ってる奴らの誰一人
こんな至近距離でナオリさんの顔を見つめたことなんてないだろう。

サラサラの髪の毛。長いまつ毛。
さっきはまともに見ることも出来なかった、つやつやした唇。

ナオリさん…ナオリさん……！

優越感でさらに興奮した僕は、思わずその唇に吸い付いてしまった。

ファーストキスだ……！

息が苦しくなればさすがに起きてしまうんじゃないかと心配してすぐに口を離したけど
我慢できずもう一度唇を重ねてしまう。

またすぐ離れては、キスを繰り返す。

エサをついばむ小鳥みたいに僕は夢中でナオリさんの唇を奪い続けた。

上唇だけを舐めたり、下唇だけをしゃぶってみたり。
恋人気分を味わってたのは最初だけで
憧れのお姉さんの唇を一方的に味わうという後ろめたい興奮に突き動かされていた。

はぁ、はぁ…もっと、ナオリさんの味を……味ぃ。

唇だけでは飽き足らなくなった僕は
ナオリさんのほっぺからあごの下まで舐めまわし
そのまま首筋や耳の裏にまでしゃぶりついた。

髪の生え際…汗の味。

これがナオリさんの味、大人の女性の肌の味。
美味しくてやめられない。

耳の溝に沿って舌を這わせたり耳たぶをくわえたりすると
ナオリさんは眠っていてもくすぐったそうな反応をして舌から逃げるように顔を動かした。

それがなんだか嬉しくて
僕のよだれでべとべとになるまで耳周りを攻め続けてしまった。

ちらりと壁にかかる時計が視界をよぎった。
はっ…としてナオリさんの耳を開放する。

そう、この妄想の実現には時間制限があることを思いだした。

薬を使う時は必死だったので時刻をよく確認しておかなかった。
僕はなんてバカなんだ。
まさかもう２時間……いや、家を出たのがあれくらいだから……
僕は性欲によどんだ頭で必死に考え、おそらくまだ20分も経過していないだろうと結論付けた。

まだ時間は結構あるけど悠長にはしてられないんだ……だったら！

一度大きく深呼吸して心の準備を整えると
四つん這いのままナオリさんの下半身方向に少し移動する。

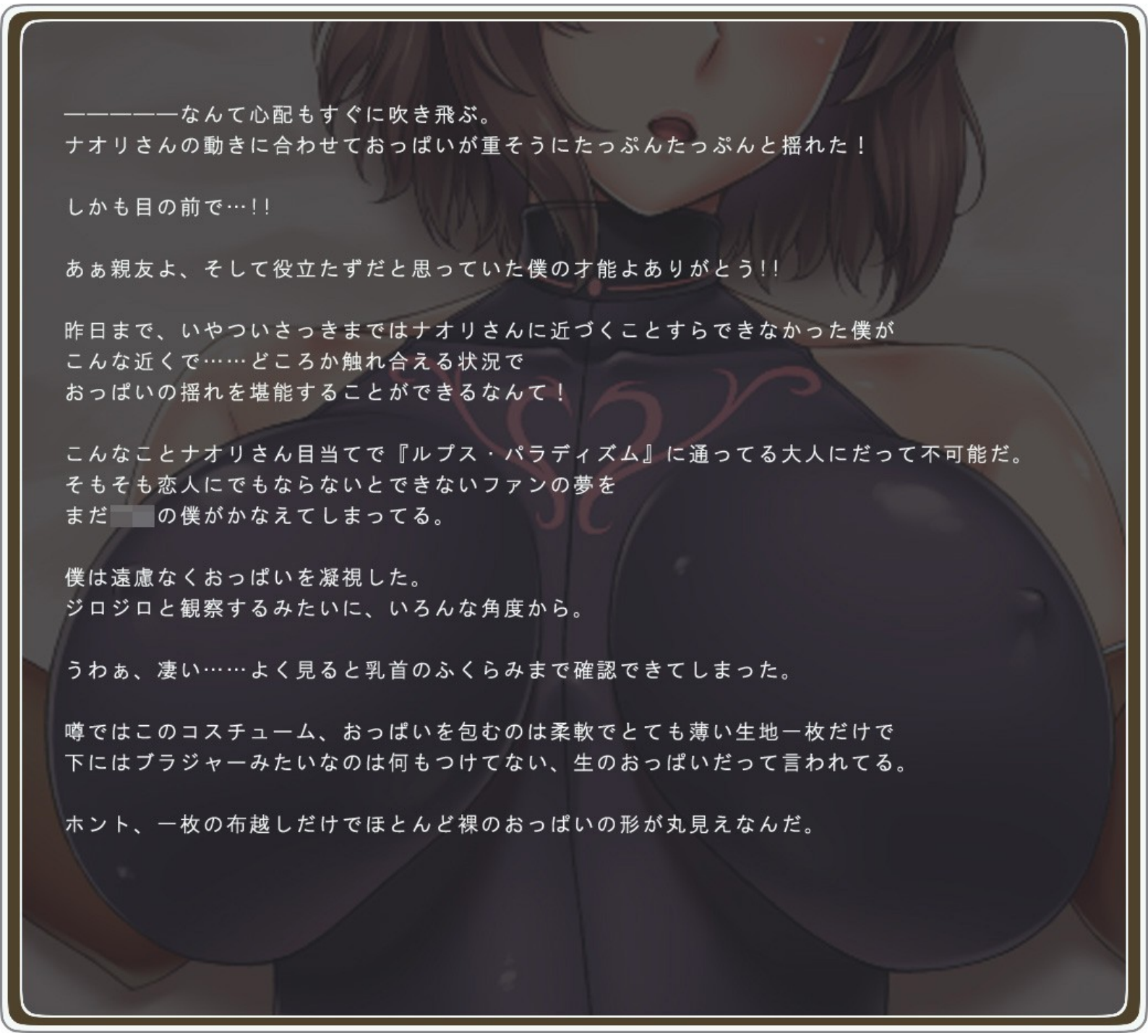
そこで僕を待っていてくれるのは……
メ、デインディッュなんて言ったら、失礼かな…うはぁぁ～。

ナオリさんの…お、大きいおっぱい……!!

もちろん、いつも覗き見てたんだから知ってるけど……
間近で、触れられる距離で見るとボリューム感が半端じゃない。大迫力だ。

「ん……ぅんん……」

その時、突然ナオリさんが身をよじった。まさか起きちゃった!?



――――――なんて心配もすぐに吹き飛ぶ。
ナオリさんの動きに合わせておっぱいが重そうにたっぷんたっぷんと揺れた！

しかも目の前で…!!

あぁ親友よ、そして役立たずだと思っていた僕の才能よありがとう!!

昨日まで、いやついさっきまではナオリさんに近づくことすらできなかった僕が
こんな近くで……どころか触れ合える状況で
おっぱいの揺れを堪能することができるなんて！

こんなことナオリさん目当てで『ルプス・パラディズム』に通ってる大人にだって不可能だ。
そもそも恋人にでもならないとできないファンの夢を
まだ[redacted]の僕がかなえてしまってる。

僕は遠慮なくおっぱいを凝視した。
ジロジロと観察するみたいに、いろんな角度から。

うわぁ、凄い……よく見ると乳首のふくらみまで確認できてしまった。

噂ではこのコスチューム、おっぱいを包むのは柔軟でとても薄い生地一枚だけで
下にはブラジャーみたいなのは何もつけてない、生のおっぱいだって言われてる。

ホント、一枚の布越しだけでほとんど裸のおっぱいの形が丸見えなんだ。

よ、よし…！
素晴らし過ぎる眺めを堪能した僕は、意を決して膝立ちになる。
すぐにでも射精しちゃいそうだった勃起にはなぜか余裕を感じる……
少し慣れたのかな。

ナオリさんの顔を見た。少し頬を赤く染め優しく微笑んでるように僕には見えてしまう。
頭の中で妄想した勝手なセリフが聞こえてきた。

『〇〇君…私のおっぱいはあなただけのモノだから……好きなだけ揉みしだいてね♥』

はい…！ ナオリさん!! さ、触ります……揉みます…！

僕は指をワキワキさせながら両手をおっぱいの左右へと伸ばしていく。
また少しナオリさんが身をよじった。
おっぱいをプルンと揺らし僕を誘ってくれてる。

『あ、でも乱暴なのはダメだからね。初めは優しく……ほら、良いよ…早くぅ♥』

はいぃっ！ ナオリさーーん!!

「ぅん……ッ!?」

僕の手には余るほど大きなおっぱいを左右から寄せ持ち上げるようにして……触った。

ナオリさんがちょっと色っぽいような声を出した気がしたけど、きっと妄想だ。

なんだ、これ……柔らかい。
柔らかいけど指が押し返される弾力もある…！
それに重い…ずっしりとした重量感で指や手のひらに吸い付いてくる!!

これが、おっぱいの感触なんだ……!!

指が温かい……。
胸の中からナオリさんの優しさが僕の身体に流れ込んでくるみたいだ。

僕はしばらくの間おっぱいを撫でまわし、その手触りを堪能した。
胸の柔らかさだけじゃなく、ちょこんととがった乳首の硬さもなぜか僕を夢中にさせる。

「……ッ!? ん、うんん……」

乳首を手のひらでまわし撫でてやると、ナオリさんは頻繁に身をくねらせた。
やっぱり、乳首って気持ち良いのかな？
眠ってても感じるの…？

『もう、乳首ばっかりぃ…〇〇君のエッチ。ほら、もっと揉まないと時間なくなっちゃうよ』

そ、そうでした…！ じゃあ、もう一度さっきの寄せるやつを……！

巨乳を左右から寄せては戻し、深い谷間を作っては小刻みに指を動かし胸を揺すった。
手を離せばおっぱいはゆさゆさと揺れながら元の位置に戻り、またも僕の手で寄せられる。

今、ナオリさんのおっぱいは僕の手で……
僕のためだけにプルプルと揺らされてるんだ。

ナオリさんのおっぱいをムリヤリ触ろうとしていたやつらめ、見たか…！

このナオリさんのおっぱいは僕だけのモノなんだぞ…!!

「んン…ッ!? ぅんッ……はぁぁ…。んぁ……」

自分でも気づかなかったほどの独占欲。
僕はこんなにもナオリさんを自分だけのモノにしたかったなんて。

ただ今の僕はそんな独りよがりな欲望も簡単に受け入れてしまう。

他の誰にもこのおっぱいは渡さない……！

肥大化し、どう満たせばいいのかも分からない独占欲に突き動かされるように
柔らかな胸のお肉に食い込む指にだんだんと力がこもり始めていた。

（……ん、ぅんん？　あれ……私、え？　どう…なってるのかしら……？
　身体も頭も…フワフワして……よくわからない感じ……。
　まるで、夢を見てるみたい……）

柔らかいだけじゃなく弾力もある巨乳は僕の指を心地良い力で押し返してくれる。
けど、おっぱいは手よりもずっと大きいし重さもあって
指から腕まで次第に疲れを感じ始めていた。

ああそれなのに……っ
どうしておっぱいっていうのは揉んでも揉んでも、揉み足りないんだろう？

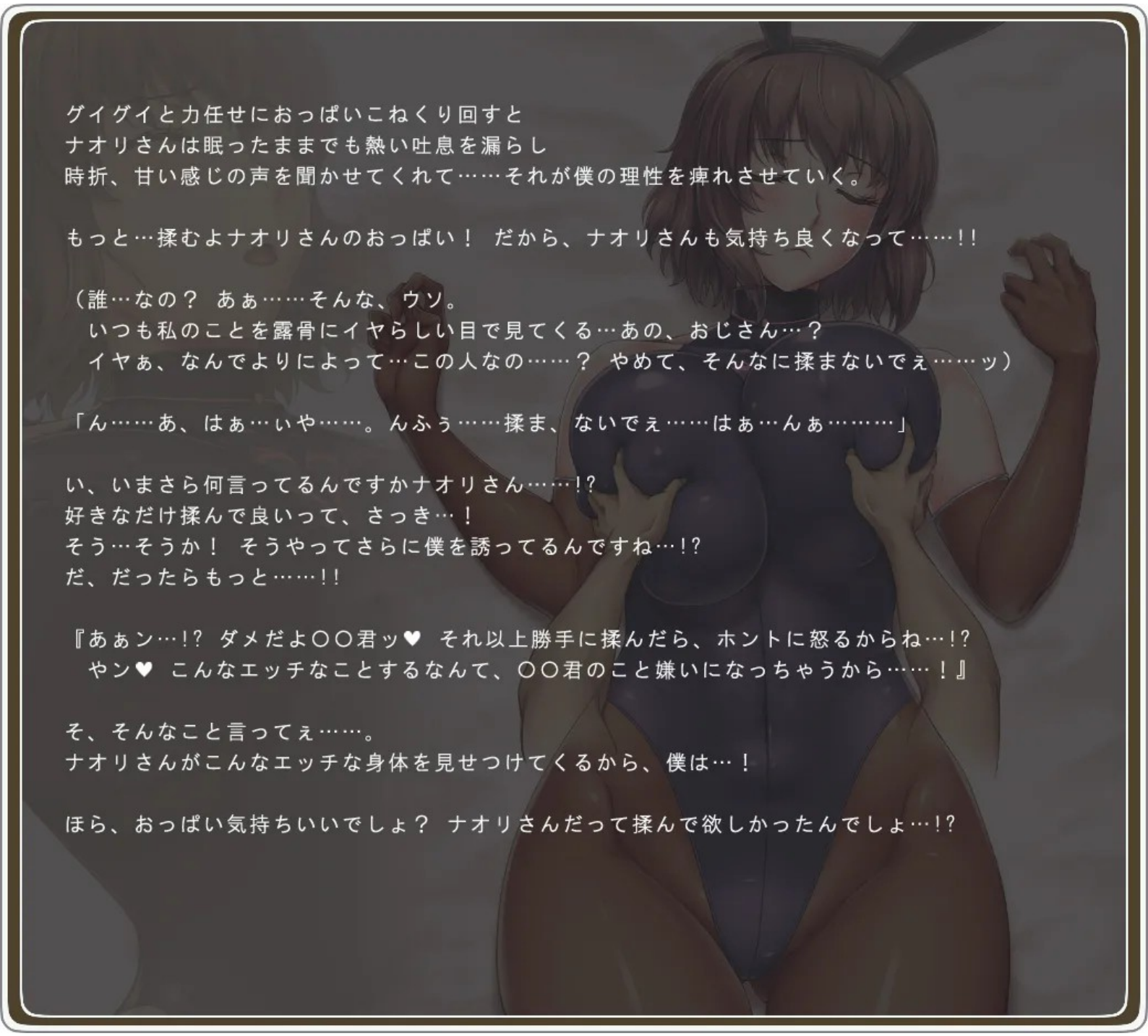
初めて揉みしだくのがこんな巨乳で、しかもずっと憧れてたナオリさんのおっぱいで
あまりにも刺激の強すぎる状況に
僕のテンションはとっくに振り切れてたのかもしれない。

しんどいはずの指には更に力がみなぎって、僕はおっぱいをこね回す様に揉みまくった。

乱暴すぎるかもって不安はよぎったけど巨乳を好き放題する魅力には逆らえない。
それにナオリさんのおっぱいは柔らかく形を変えて
僕の指をどこまでも受け入れてくれる。

ナオリさんはおっぱいも優しいんだね……！　好きだ、大好きだよナオリさん…!!

（あぁ、そっか……夢なんだ。そうよね、じゃないと、おかしい……こんなの。
　胸を、誰かに触られてるなんて……
　しかも、こんなイヤらしく……あぁ、なんでこんな夢）



グイグイと力任せにおっぱいこねくり回すと
ナオリさんは眠ったままでも熱い吐息を漏らし
時折、甘い感じの声を聞かせてくれて……それが僕の理性を痺れさせていく。

もっと…揉むよナオリさんのおっぱい！ だから、ナオリさんも気持ち良くなって……!!

（誰…なの？ あぁ……そんな、ウソ。
いつも私のことを露骨にイヤらしい目で見てくる…あの、おじさん…？
イヤぁ、なんでよりによって…この人なの……？ やめて、そんなに揉まないでぇ……ッ）

「ん……あ、はぁ…ぃや……。んふぅ……揉ま、ないでぇ……はぁ…んぁ……」

い、いまさら何言ってるんですかナオリさん……!?
好きなだけ揉んで良いって、さっき…！
そう…そうか！ そうやってさらに僕を誘ってるんですね…!?
だ、だったらもっと……!!

『あぁン…!? ダメだよ〇〇君ッ♥ それ以上勝手に揉んだら、ホントに怒るからね…!?
やン♥ こんなエッチなことするなんて、〇〇君のこと嫌いになっちゃうから……！』

そ、そんなこと言ってぇ……。
ナオリさんがこんなエッチな身体を見せつけてくるから、僕は…！

ほら、おっぱい気持ちいいでしょ？ ナオリさんだって揉んで欲しかったんでしょ…!?

それとも、[redacted]だと思ってからかってたんですか!?
僕の目の前でこんな大きなおっぱいを揺らしてっ。
だったらお仕置きしないと…！ ナオリさんだからって許しませんよぉ……！

（やめて…お願い……！
いくら、夢でも…あなたみたいな人に、触られるのは…イヤなのッ）

ナオリさんは僕の性欲をかきたてるために
身体を揺らして、嫌がるそぶりまでしてくれる。

あぁ…僕の勝手な妄想にまで付き合ってくれるなんて…！
優しすぎるよ、ナオリさぁん!!

ならもっと揉むよ、ほら…ほら!!
どうせ、僕だけじゃなくてクラスの奴らのことも
ううん、『ルプス・パラディズム』に集まる男全員……
このエッチなコスチュームとおっぱいで誘惑してたんだ…！

『違うのぉ…信じて〇〇君ッ。
私がおっぱい触ってもらいたかったのは…あなただけなのぉ。
あなたの、〇〇君だけのバニーガールのお姉さんになってあげるからぁ♥』

そうだよ…ナオリさんは、ナオリさんの身体は僕だけのモノだからね……！

もう他の誰にもその格好は見せないで
僕だけのためにこのエッチな身体を見せてよね…!!

（やだ、こんなの…あの人のことまで……思い出しちゃう…!?
　早く、夢から覚めさせて……！
　あぁッ!? あなたみたいに…身体目当てで、言い寄ってくるような人はもうイヤぁ……！）

ナオリさんのゾクゾクさせてくれる反応に
僕のバカみたいな妄想も合わさって、急激に射精感がこみ上げてきた。

あぁ……！ 我ながら良くここまで我慢できたもんだ。

射精したい…このままおっぱいを揉みまくりながら……？
顔…く、唇に押し付けて……!?

ま、待てって僕…!!
まだ、時間があるのに射精しちゃうなんてもったい…ない……っ。

いつもなら、一回射精したくらいでナオリさんへの性欲が消えるなんてことは無いけど
きっと…今回のは凄いことになる……
今まで経験したことが無いほどの射精に……！

そしたら文字通り……精も根も尽き果てちゃう…!!

射精したいけど…！ 射精したくない……!!

僕はきつく歯を噛みしめた。
男の本能や性欲と、気力…気合が戦ってるっ…！

（あぁ……やめてくれたの、かな？
　良かったぁ……あれ？　でも私、どこで寝てるんだっけ？）

僕はナオリさんの上で四つん這いのまま
ベッドのシーツをきつく握りしめて射精感と戦っていた。

気を抜くと勃起したモノを自分で握ったり
ナオリさんの身体にこすり付けそうになる。

いや、そうしたいんだけど……っ。すればもの凄く気持ち良い射精で……!!

「んん…ぅん……」

その時、寝返りをうとうとしたのかナオリさんの脚が動き……
滑らかなストッキングに包まれた太ももが、アレの先っぽに軽く触れた……！

……で、射精ちゃう……!?

射精を覚悟したまさにその瞬間————

コンコンッ、コンコン！

と、ドアがノックされて……
僕はドアに鍵をかけていなかったことに、ようやく気が付いた。

「ナオリさーん？ ここにいますか？」

!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!

真っ白になる頭。
全身の血の気が引いていく感覚。

でも僕の身体は思考から離れ…自動的に、はじかれたように動き……

……気づいた時には、ドアの鍵を閉めていた。
思わず力が抜けて座り込んでしまう。良かった…もしこんなところ見られたら……。

「……ん、鍵かかってる。おかしいわね、どこ行っちゃったのかしら……」

ぅわ……あ、あはは…ははは……。

この状況でも股間のモノは硬さを失っていない。
我ながら大した性欲だ…。

ああでも、あんなに切羽詰まっていた射精感は……さっぱり消え去っていた。

……よし……誰も、いないな。

ゆっくりと扉を開け、頭だけを部屋の外に突き出した僕は周囲の様子を確認した。

レストランコーナーよりも奥にある少し暗めの通路にひと気は無い。
どこもお客さんでまだにぎわっているみたいで、かすかにざわざわとした音が聞こえてくる。

いきなりのノックには信じられないほど驚いたけど
そのおかげで鍵の閉め忘れに気づけたし、ギリギリだった射精も我慢することができた。

こんな夢のような状況の中で、更に僕にとって都合のいいことが起こるなんて。
運が良いってだけで、済ませて良いんだろうか……。

そぉっと頭を引っ込めると、静かに扉を閉め改めて鍵をかけた。

いや…今、余計なことを考えるのはやめとこう……。
今は、ナオリさんだ…ナオリさんを……!?

……って!? な、なんだこれ……この、匂い…っ？
濃くて甘い…香り……!!

通路の…外の空気を吸ったから気づけたのかな？ かすかだけど部屋に漂う濃密な香りに。
くらくらするほどの甘い匂い……それがどこから香るのか、考えるまでもなかった。

ナオリさんの…さっき嗅いだのよりずぅっと濃い、女の人の匂いだ。
まさにフェロモン……男を狂わせる魅惑の香り。

僕は舌なめずりをすると、花の蜜の匂いに誘われるハチのようにナオリさんへと近づいて行った。

そこに横たわるのは、甘い蜜を秘めた大輪の花だ。
何もかもが男を誘惑してしまう、可憐だけど淫らな花。

最初よりも熱く早くなった寝息で大きなおっぱいがタプタプと規則的に揺れている。
でも僕はさっきまで夢中で揉んでいたその胸には手を伸ばさず、ナオリさんの腰に思い切り抱き付いた。

ナオリさん…！ ナオリさぁん…!!

勃起したモノがベッドのシーツやナオリさんの脚にこすれたけど、この程度は何てこと無い。
一度あの強烈な射精感を乗り越えたことで、僕は男として強くなれた気がしていた。

ふ、ふとももも！ お尻も…！
おっぱいとは全然違う感触だけど、女の人の身体はどこもとても柔らかくてたまらない!!

「ん……ッ、あはぁ…んん……」

ストッキングに包まれた太もも……。
汗をかいているのかなんとなくしっとりとした触り心地だ。

表面の柔らかな揉みごたえとその奥にしっかりと詰まった筋肉を感じる。
無駄な脂肪は無いけど、痩せすぎてもいない。男にとって理想的な身体だ。

さすが、ナオリさんだ…！ 男心が良くわかってるぅ……！
おぉ……内ももの方は少し感触が違ってる。

あ、脚の付け根の方までは…ヤバいかなぁ。

「…ッ!? んふぅ……んッ…はぁ、はぁ……」

ふ、ふふふ……くすぐったいですか、ナオリさん？ それとも恥ずかしい？
僕の指、ナオリさんのアソコ…一番大切なところのすぐ近くを触っちゃってますよぉ……。

そこはほかの部分よりもさらに熱くて…じんわりと湿り気を帯びている気までした。
このまま触ってしまいたい衝動にはかられるけど
服の上からでさえそこに触れるのは……怖い。

やっぱり僕はまだ[redacted]なのか、それとも憧れのナオリさんの寝込みを襲ってるやましさからか
その一線を越えることは出来なかった。

でも、性欲だけは止まらない。
もう一方の手はベッドとナオリさんの身体の間に差し込まれ
プリプリのお尻を撫でまわし続けている。

太ももとは違いベッドに密着していたお尻はじっとりと汗をかいていて
ストッキングの滑らかさを、さらに指に吸い付く極上の手触りへと変えてくれていた。

ベッドとの間に挟まれた僕の手に密着するナオリさんのお尻の柔らかさ……！
おっぱいとはまた違い、柔らかさと張りが絶妙な二つのお肉の山を交互にこねて揉みまくる。

さっき見た前を歩くナオリさんのお尻を思い出しながら、僕は勝手な征服感に浸っていた。

「んはぁ……はぁ…んッ。ぅんん……い、いやぁ…はぁ……あぁ…んん……」

ときおりお肉の谷間に指が滑り込んでしまい、ナオリさんの大切な部分に触れそうになってしまった。
自分でも度胸が無いと思うけどやっぱりそこには触れない。

触るならいつか、堂々と……。

とはいえ、太ももでもお尻でもそのギリギリの部分を触り撫でたり揉んだりすると
ナオリさんは腰をくねらせ…太ももを寄せあわせるように動かし反応してくれた。
それがまた僕を、たまらなく興奮させるんだ。

あぁ、ナオリさぁん……おっぱいもだけど、太ももとお尻も僕のもですよぉ。

抱き付いて身体を触り放題してる間
僕の口はというとナオリさんのお腹のあたりを舐めまわしていた。

薄い布越しの体温を舌で感じながら、筆をはしらせるかのように舌をはわせだ液を塗りたくる。
ナオリさんは自分のモノだとマーキングしてる気分だった。

美味しいよ、ナオリさん。服の上からでもナオリさんの味が分かるよぉ。

もちろん完全な思い込みだけど、再びテンションの振り切れていたこの時の僕は
たしかにナオリさんの甘い肌の味を感じていた。

（あぁ……いやぁ…ッ！ ま、また…この夢なの……!?
今度は…お尻を、太ももまで撫でまわされてる。
またあのおじさん……？ あ、あの人……？ わからない、私もう…分からないわ……）

ナオリさんの下半身を堪能していた僕に、おっぱいへの性欲がまたうずき始める。
特に舐めることに夢中になっていた僕はおっぱいの味を確かめたくて……
というか乳首に吸い付きたくて、ナオリさんの身体をよじ登るように移動を始めた。

（誰だかわからない男の人が、私に抱き付いて……好き勝手に身体を触ってる。
もうイヤ…結局みんな私の身体ばっかり……。
私自身より、胸やお尻にばかり興味を持つんだわ。

お店に来てくれてる男の子たちもいつかは……〇〇君も……）

両手は名残惜しそうに太ももやお尻からなかなか離れない。
でも焦る必要はないんだ。
だって目当ての山頂はすでに目と鼻の先にあるんだから……！

（ううん…〇〇君はおとなしくていい子だから……。
きっと、大丈夫…エッチなことばかり考えない、しっかりした男の人に……）

ゆっくりと動き最初と同じ四つん這いの体勢に戻って
またも大きすぎるおっぱいを見下ろした。

穏やかに上下する胸…その先端。薄布を押し上げ主張するナオリさんの乳首だ。
顔を近づけ間近でじっくりと凝視する。

不思議だ…男にもあるものなのに、なんで女の人のだとこんなに興奮するんだろう。
息が荒くなる、舌先にある乳首にも僕の熱い息がかかっている。

わ、わかりますか…ナオリさん？ 僕、これからこの乳首を……。

「はぁ……んんッ…あぁ……だ…だめ……ぇ。はぁ…んふぅ……んん」

（あン!? あぁ……なにこれ、胸が熱い。
　また、揉まれちゃうの…私……んんッ!?
　あ、違うこの感じ……熱い吐息、あの人も最初…こんな風に私の乳首を凝視して……）

ナオリさんはまたも僕を誘うように嫌がるようなそぶりを見せて、おっぱいを揺らしてくれた。
でも、どんなに胸が揺れても僕の視線が乳首から外れることは無い
外せるわけがないんだ……！

吸います…!! ナオリさんの乳首、僕にたっぷり味あわせて…!!

（いや、いや…！ ダメなの乳首……!!
　あの人に乱暴に吸われても…気持ち良くて……ダメ！
　乳首は許して！ お願い…!! こんな夢早く覚めて、もうイヤぁ……!!）

僕は、口をめいっぱい開いて……ナオリさんの乳首に吸い付いた!!

「ぃいン……!?」

（あぁ!? ち、乳首ぃ……♥ はぁン…ダメぇ……!!
　やッ…あン!? そんな、吸っちゃ……んんッ!?
　この人…す、凄い夢中で吸って……くぅン!? き、気持ち良……って、え？ あ、あれ……？）

僕は自分でも抑えられない勢いでナオリさんの乳首を吸いまくった。
これじゃあまるでお腹ををすかせた赤ちゃんだなぁ……と
自分の中の冷静な部分が考えてしまうほどに。

理性とかけ離れた、本能的な欲望で僕は乳首を吸い続けている。
吸いたい、もっと吸わせて…と。

あぁ、でも…赤ちゃんていう例えは正しいのかも。
赤ん坊は食欲で、男は性欲で乳首に吸い付く……結局どちらも根源的な欲望なんだから。

だから美味しいと感じる。だから興奮する。
ナオリさんの乳首からは何も出てこないけど、美味しいんだ！
母乳じゃない、男を悦ばせる『何か』が出てきてるに違いない。

ナオリさん、美味しいよぉ。もっとぉ…もっとぉ……!!

（か、感覚が……はっきりしてくる…？ これ、私もう夢から覚めてるの……？ あン…!?
　でも…確かに誰かが私の乳首を……んんッ!?
　現実じゃありえないのに…ど、どうなってるの……？）

口をすぼめた僕は今日一番の吸引力で、おっぱいの形が変わるほど乳首を吸い上げる。

乳首も伸びてしまうんじゃないかと思うほど、息が続かなくなるまで吸って
勢いよく口を離した…！

「きゃン…!?」

おっぱいはブルンッと弾んだ後、また元の綺麗な形に戻る。
凄いなぁ…おっぱいって、ホント凄い。
その形、柔らかさ…動き……。何もかもが男の性欲をたかぶらせてしまうんだから。
乳首は最初よりも硬く大きくなって、僕に吸って吸ってとねだっているみたいだ。

ゴクリ……！

そういえば今…ナオリさんの声がはっきりと聞こえたような気がしたけど……。
時計を見た。時間は……まだぜんぜんある。
きっとまた妄想の中の声だ。

じゃあ、もう一度。おねだりは焦らして…こっちの乳首を……いただきま～～す♪

「ぁン…ッ!?」

さっきまで吸っていた方じゃない乳首に勢いよく吸い付く。
ナオリさんの身体がびくりと震えて……眠っててもも感じてくれるんだと、僕を悦ばせてくれた。

（凄かった…さっきの刺激……。
久しぶりに感じた、乳首を攻められる……どうしようもない快感。
でも、信じられない…いったいどうしてこんな状況に？ 私いつの間に眠ってたの……？）

「ン…くぅ…んッ……。はぁ…はぁ……ふぁ……」

（あぁ、そっちの乳首まで……ヤダ、気持ち良い。
はぁ…でも、声は出さないようにしないと。
きっとこの人は私を眠らせて、寝ている間に……して、しまおうと考えてるんだわ…最低……）

（……だったら、私が今起きちゃってることにはまだ気づかせない方が良い。
　起きてることに驚いて、もっと動揺させられるタイミングを見計らわなくちゃ。

　それまで、これを我慢しなくちゃならないのは……心の底から嫌だけど…）

こっちの乳首も美味しいよぉ、ナオリさぁん！
舌で、舐めるのとか、どうかな……？

うはぁ、良いんだね？ 身体ビクッとしたよナオリさん……もっと、もっとしてあげる…。

「ぁッ……んっくぅ…んんッ……。や……もぅ…くぅ……ッ」

（そんなにしないで…私、ホントに乳首弱いのに……！ 声、我慢できないぃ…！
　もう……なんで、こんな乳首ばっかり吸うのよ？ 私が弱いの気づかれてる……？

　でも、このがむしゃらさ……なんていうか、慣れてない……感じも…？）

凄い、ナオリさんの身体…ビクビク震えてる。僕が乳首で感じさせてるんだ……!!

その実感が嬉しくて僕の乳首への吸い付きはさらに熱く激しくなった。
しゃぶり付いたまま舌を小刻みに動かして、口の中の乳首を舐め転がしてやると
ナオリさんは眠りながらも唇を固く結んで気持ち良さを我慢してるように見えた。

一方の乳首を舐めしゃぶりながら、もう片方のおっぱいを横目で見る。

僕に揉まれて吸われて……刺激され続けたナオリさんのおっぱいは熱を帯びて
なんだか大きく、張りが良くなってきている気がする。

乳首もあんなに大きくなっちゃって、一緒には吸えないからせめて指で……。

「ッ……!? あッ…ん……！ はぁ……あ、これぇ……んんッ……」

（吸われてない方の乳首……触り始めたのね。
　びっくりしたけど…指は、そんなでも……。
　触るのは、あんまり上手くない…ぎこちない感じがするわ……はンん!?

　でも、だからって気持ち良くないわけじゃないのね……
　あの人しか知らない私は…慣れない指使い自体初めてだもの……新鮮で、くすぐったい。
　それに両方いっぺんに弄られるのは、やっぱりすごい気持ち良い……ッ）

ナオリさん身体の反応が凄い……！
両方の乳首いっぺんに刺激するの、やっぱり感じるんだね。

乳首を吸うのに集中しちゃうと指にまで意識が行かなくて細かい動きはできないけど
もっと早く、乳首をはじくようにすれば……どう？ どうかな…？

「んんん……!? あ…ちょ……んッッ……くぅ…ん！」

（やだ…もう……！ そ、そんな風にするの…ダメ！ 私…こういうの、好き……。
　あぁ…どういうことなの…？ 相手を眠らせて襲おうなんて人が、ぎこちないはずが……。
　待って…でも、逆だとしたら……眠らせないと、襲えないような人……？）

乳首を思い切り吸いながら、もう片方の乳首に指を当てて
手を振るように素早く左右に動かした。
複数の指に何回も刺激されて、ナオリさんは身体全体をのけぞらせて感じてくれてる。

僕はナオリさんの反応の虜になり、呼吸をおろそかにしてまで乳首に吸い付き続け指を動かした。
だんだん息苦しくなって頭がぼぉっとしてきても性欲は止まらない。

大好きなおっぱいを堪能して、そのおっぱいでナオリさんをもっと気持ち良くさせたかった。

「んッ…くうぅぅン……!? あッ…んんッ……んっく…ぅんッ!? んぁ……ッ!?」

（は、激し…!? やッ……こ、声が出ちゃう……!?
我慢、しないとぉ……ぉああッ!?
もうっ…もう…ッ！ どれだけ、おっぱい好きなのよ……!? 乳首…ダメぇぇッ。

こ、この感じ…やっぱり、おかしぃ……!?
まるで…おっぱい初めてで、無我夢中みたいな……）

「んんんンン……ッ!? くぅ…ん!! やぁ…はっ…はぁ……ッ、あはぁ……んくぅン…!?」

（このままじゃ…ダメ……！
目をつぶったままじゃ、何されるかわからなくて…余計感じちゃうッ。
正直、目を開けるの怖いけど……見なくちゃ、どんな人が…私にのしかかってるのか……）

「はぁ…はぁ……ッ。んッ…んんぁあ……!? や、ああぁ……だ、誰……なの…？」

（照明が…まぶしくて……薄目じゃ良く見えな……？
お、思ったより…小柄な人……だ。
あれ…？ ここ、知ってる……？ さっき私…この部屋に……あのコと……）

「んぁ、あはぁ…くぅ、ん……？ ッ？ えッ!? あ、え？ ッ!? っ!?!?!? ッ!?!?!?!?!?」

（……ウソ、こんなのウソ…おかしいわ。
だ、だってこんな……もしかして、まだ夢みてるの？
あぁ…ダメ、信じたくないけど……どうして？ どうして…あなたが……!?）

「あッ……んふ、ン…!? やめて……お願い、んっくぅ…!? ○…○○君……ッ」

息をするのが面倒になるほど乳首に吸い付いていたせいで
僕の肺は限界を超えたみたいだった。

急に身体に力が入らなくなり、そのままナオリさんの上に倒れ込んでしまう。
おっぱいに顔をうずめる幸福感もそこそこに、荒い呼吸の繰り返しでしばらく動けずにいた。

フワフワとした頭でふと思い出す……。
さっきナオリさん、僕の名前を呼んでくれたような……。

でも、おっぱいの間から見上げたナオリさんは静かな寝息でまだ眠っているように見える。
また聞き間違いかな……はぁ、そろそろ動かないと時間が……。

（〇〇君……そんな息が苦しくなるほど夢中になってたなんて…よっぽど胸、好きなのね。
　でも、もう終わりにしましょ？ 〇〇君、まだ[redacted]なんだから焦らなくても……）

「はぁ…はぁ……はぁ……ひゃッ!? えッ…？ ッ!? こ……これって……!?」

うはぁ……ナオリさんも分かる？ ヤバいよこれ、気持ち良いぃ…！

ようやく力の入りだした身体を動かそうとしたら
ずっと力を失わずに硬いままだった勃起がナオリさんの脚に偶然当たり
しっとりすべすべのストッキングの表面でこすられた。

信じられないほど気持ち良い。

さっきは射精を我慢したギリギリの状態だったんで、感触どうこうの余裕はなかったけど
今は違う…成長した僕は……自分からこすり付けてやるんだ……！

僕のを感じて…ナオリさん……！ これが、僕のだよ…!!

（この熱くて硬いの……
　太もものあたりに押し付けられてるこれって…〇〇君の……アレなの!?
　ウソ、でしょ…!?
　[redacted]、[redacted]でもこんなになっちゃうものなの……？）

ナオリさんに抱き付いたまま腰を揺すって股間を押し当てていたけど
だんだん物足りなくなってくる。

なんて贅沢モノの自分……だけど勃起に血が集まって力強さを増していくと同時に
身体にも再び精力が巡り始め、性欲もまたぐんぐんと高まってきた。

『くぅぁぁ……っ。ナ、ナオリさぁん……！』

「は、はい…!? あ、んん……ッ！ ふぅ…ふぅ……んッ!? んん…ッ!?」

自分の声を久々に聴いて、少し驚いた。

どうやら僕は、ナオリさんを起こさないように声を出すのを我慢していたらしい。
でも、それももうお終いだ。時間もあともう少し…ラストスパートを……！

両腕は伸ばし股間だけをナオリさんに押し付けた体勢になり、身体を動かしやすくする。
僕は一度大きく息をすると、勃起したアレを太ももに密着させ腰をゆっくりと回した。

（ッ!? お、大きい……!?）

『うはぁぁ!? はっ…はぁ……！ うわぁ……』

ナオリさんの身体も僕のモノの熱さに驚いたのか、びくりと震えたけど
一番驚いたのは僕自身だ……。

あまりにも気持ち良い、気持ち良すぎる……!!

このまま股間のモノをこすり続けたい衝動を必死に抑え、少しだけ腰を浮かした……。
勃起はナオリさんの太ももの上に横たわりドクドクと脈動し続けている。

やっぱりあっという間に射精してしまうかもしれない…でもギリギリまで楽しんでやるんだ。
僕の決意に応えるように相棒はビクンと一度跳ね上がった。

よし、じゃあもう一度……。

『くぅ…ぅううあ……あぁっ…ナオリさん、ナオリさん……！』

（男の子って凄い……かわいい感じのコだと思ってたのに
　〇〇君の……とっても、大きい。
　勃起…したの見るの、これで二人目だけど……あの人のにも全然、負けてないわ……。

　や、やだ…私ってばなに凝視してるのよ〇〇君に気づかれちゃう……!?
　でも〇〇君目をつむってるから大丈夫そう……
　歯も食いしばって…射精、我慢してるのね）

ゆっくり、ゆっくりとだ……気を抜くと思いっきり腰を動かして射精したくなっちゃうから……！
もっと感じてたいだろこの感触…あのナオリさんの太ももにアレをこすりつけてるんだぞ!?
もう二度とこんなこと、できないかもしれないんだからぁ……!!

『はぁ〜…ぁあ……ふぅぅううっ!? っはぁぁ〜〜…ぁぁあ。ゆっくりぃ……くぅああ』

（熱さも凄い…太もも火傷しちゃいそうだわ。
　〇〇君の想いの熱さが伝わってくるみたい……。
　あの人のにこんな熱は感じなかった……あなたの方が私のことを想ってくれてるの…？

　我ながらバカみたいなこと考えてる。
　〇〇君だって私のことを眠らせてイヤらしいことをしてたのに……
　それでもこのコは、他の男の人とは違うって信じたい）

「……○○君……」

『あぁぁ…！ ナオリさぁん……!! もう少しで…で、射精ちゃいそうでぇ…くはぁぁ!?
もっと、したいのに……はぁ、はぁ！
ナオリさんと、気持ち良いこと……!!』

（なんだかドキドキしてきた……。
年下の男の子が自分の名前を叫びながら、腰を動かしてるなんて。
初めてならそんなに我慢できないだろうから…たぶんそろそろ射精しちゃうわよね。

でも、このままこすりつけるだけで終わるのなんて……
ちょっと、可愛そう……）

もうっ、早く動かしちゃおうかな…!?
そろそろ、ホントに限界だ……惜しいけどぉ…！

ナオリさん、もうちょっとで終わるから……あと少しだけ身体、僕の自由にさせて……!!

『ナオリさん！ ナオリさん…！ ナオリさんっ……ナオリさ…うわぁぁ……!?』

腰を早く動かす決心を固め下半身に力を込めた瞬間――――――

（なるべく自然に…眠ったまま自然に動いてる感じで……力を抜いて……）

突然ナオリさんの身体が動いた…！
僕は驚いて、跳び上がるようにナオリさんから離れてしまった。

『…って、あ…ナ、ナオリさん…？ お、起きてない……よね…？』

ナオリさんは寝返り…というか、身体を横にしただけでまだ眠ってる。
変だな……これくらいの動きならさっきまでもあったのに
なんで僕…こんなに驚いたんだろう？

なん…となく……ナオリさんの意思みたいなのを、感じたのかな……。
あ、それより体勢変わっちゃった…どうしよ……ぉわあぁ!?

ナオリさんが横を向いて両足を椅子に座ったような体勢になってくれたおかげで
お尻が見えるように……！

やっぱり柔らかいなぁ……お、お尻にこすり付けるのも…気持ち良いよね。

「んん…ッ。はぁ…やぁ……んッ…もう……あっ、はぁ…あぁ……」

（〇〇君ってば…お尻、触ってる場合じゃなくて…もうッ。射精したいん、でしょ……？
ほら……男の子なら分かるよね…？
ここ…ここを……使えば……ね？）

とにかく、もう射精したいんだ……ナオリさんの身体を使って射精したい…！

僕は勃起の先端をお尻や太ももに当て、腰をうまく動かせる体勢を探っていると……
『そのやり方』に気づいてしまった。

で、でも…こんなことしていいのかな…？

（あッ…熱い……。ほら、ここだよ〇〇君…たぶん気持ち良いと思うから…ほら）

でも、それに気づいてしまった僕は……その射精方法への欲を断ち切ることは出来なかった。

ガチガチに硬い股間のモノをにぎった僕は、膝立ちになり腰の高さを合わせると
そこに勃起の先端を押しこむように当てた……！

『い、いきます…ナオリさん……！　ここに僕の…挿入れちゃいます…!!』

（良いよ…きて〇〇君……ッ。今だけは、私の身体で気持ち良くなって……！）

ナオリさんの太ももが僕のモノを誘うように動いた……！

い、挿入れます……ナオリさんの、太ももと太ももの間に……
ナオリさんの…大切なところにも……こすりつけながらぁぁ……!!

『ナ…ナオリ、さぁん!!　うはぁ…あ、うあああああっ……!?』

僕は自分の勃起が温かく柔らかいお肉に包まれる快楽を、初めて知ったんだ。

（あぁ…熱いぃ……ッ。太ももの間で燃えてるみたいに……あ、アソコにも熱さが……。
こんなの初めてで変な感じ…。
〇〇君はどう？ 気持ち良いかな…？）

『はっ…はぁっ、はぁ！ あぁ…！ ナ、ナオリさ……ん…っ。ヤバいよぉ……！』

これ…気持ち、良すぎる。
さっきもそう思ったけど…比べ物にならない気持ち良さ……！

ナオリさんのムチムチな太ももものお肉と、大切なところのプニッとしたふくらみに
僕のモノが…隙間なくみっちりと包み込まれてぇ……こんな、こんなの……っ。

『凄、すぎるよぉ…っ。ナオリさんっ……僕、僕ぅ…！ うはぁぁ……!?』

（声、うわずっちゃってる。気持ち良いんだね……良かった♥
でも、動かさなくていいの？
動かした方が気持ち良いんじゃないかな……んッ…ほら、どう……？）

『ッ!?!?!?』

ナオリさんが、脚を動かした……!?
そんな肌触り抜群のストッキングで、勃起を撫でられたらぁ……!!

『でっ…射精ちゃ……うぅ!? ナオリ、さ…待って……！ 動いちゃ…あぁ!?』

（そっか、すぐに射精しちゃいそうで…動けなかったのね……ふふふ、ゴメンね。
　でもこんなに硬くしてるくせに、可愛い困り顔されちゃうと
　なんだかいじわるしたくなっちゃうなぁ）

ま、待ってよナオリさん……っ
そんな、両脚を…こすりあわせるようにされたらぁ……

あぁ…!? 僕のがナオリさんの太ももにズリズリされてぇ……ほ、ホントに射精ちゃうぅ…！

ダメだ…一回、抜かないと……あぁう!?
で、でも…こんな密着されたお肉の中で、腰を引いたら
それこそ快感が強すぎて…きっと、我慢できない……！

ど、どうすれば……!?

『あうぅぅ…!? はっ…ふはぁっ……ふぐぅ…!? ナオリ、さぁん……ナオリ…さ……!!』

（ふふふ……ちょっと可哀そうだけど
　〇〇君がいけないことしたのは事実なんだから…これはお仕置きね。
　せっかくなら一回くらい腰を振ってみたいでしょ……だったら、頑張って我慢して。

　あぁ凄い…〇〇君のがドクドク脈打ってるのが分かるわ。
　私ッたら……なんか…はぁ……）

な、なんでこんな…急に動き出したんだナオリさん!?
僕のが気になって、どかそうとしてる……？

それとも……眠り薬の効果が切れだしたのか…!?
時間的には、もう少しあるけどぉぉ……!?

このまま、ナオリさんの脚の動きで射精させてもらうのも……
幸せだけど、やっぱり自分で……っ。

さっきだって…射精ギリギリを乗り越えたじゃないか…！
できる……できるはずだ、僕は！

『はっ…ふぅぅ、はぁ…！ すぅぅ～……はぁ～～～…すぅぅ……はぁぁぁ～……』

まずは呼吸を整えて…落ち着け、落ち着け！ 落ち着け…!!
大きく硬くしちゃうのは、気持ちではどうにもならないかもだけど……
射精は、きっと少しはコントロールできるはず…！
とにかく落ち着いて…切羽詰まるな……!!

そして…射精を我慢するためにギュッとつぶっていた目を開いた。
見ないから…ダメなんだ……。

（ッ!? 薄目開けてるのバレちゃうところだったわ…。〇〇君、どうするつもりなのかしら？）

お尻、太もも……その向こうには揺れるおっぱい。
見ただけで興奮しちゃうけど……。

ナオリさんの脚が、ゆ…っくりと動いてる。太ももに挟まれた勃起はその刺激に震えていた。

これだけ緩慢な動きでもこんなに気持ち良いだなんて……！
これが、僕の経験したことの無かった
女の人と直接触れ合っての気持ち良さなんだ。

で、でも……。

『こ、これくらいの動きじゃ……射精せないよ。
　いつも、どれだけしごいてると…思ってるんだ……っ』

（え……〇〇君…？）

僕は両腕に力を込め脚の動きを、止めた……ナオリさんは簡単に止まってくれた。

よぉし…もっと落ち着け、落ち着くんだ僕。深い呼吸を繰り返して……。

今はナオリさんのことも考えるな……
ノックの時みたいに頭を真っ白に、無理やりにでも真っ白に。
股間を圧迫する柔らかさも、これも布団か何かだと無理やり思いこめ……！

『すぅぅ～～…はぁぁ～……。すうぅ～……、はぁ～～～。すぅぅ～……』

（〇〇君…なんだか雰囲気が変わったみたい……んぁ…アレの脈動も弱くなってきたような……）

射精、我慢できてる……!? いや…これだけじゃダメだ……っ。
我慢したって射精が近いことには変わりないんだから……
自信をつけるんだ、僕に自信を……！

『う、動かすよ……ナオリ、さん……っ』

（〇、〇〇君……!? 大丈夫なの…？ 射精しちゃう寸前だったんじゃ……）

僕は身体全体に、特に腰に力を入れすぎないイメージを繰り返し想像しながら……

ゆ……っくりと、股間のモノをナオリさんの太ももの間から引き抜いていく……！

『っ!?!? っはぁ……!? く…すぅぅ〜〜〜……んん、はぁぁ〜〜……んあぁ…！』

ゾクゾクゾクゾク!!
……と震えるほどの快感が股間から身体中に伝わった……！

気持ち良いぃ〜……射精したい…！ 分かるぞ、僕……分かるけど、今は考えるなぁ…！

アレの先端にある段差が常にストッキングに引っ掛かり続けてる…。
ナオリさんの太ももが僕に『抜かないでぇ』と訴えかけてるみたいだ……くそ、たまらない…！
というか、僕のモノの方が引っこ抜かれそうだよぉ……。

「あッ…はぁ……はぁ…んッ……やぁ……」

（太ももの間の熱い、肉の棒が抜かれてく……やだ、なんだか…切なくなっちゃう……）

『す、すぅぅぁ〜〜…はぁぁ…！ すぅ〜〜〜……はっ、はあぁっ……くふぅぅあ…!?』

ぬ、抜けたぁ……!!

僕は射精を耐え、優しくも力強い圧迫の中からようやく勃起を開放することができた…！
この長さを引き抜くだけなのに、とんでもなく時間がかかった気がする。

（あン……!? あぁ…抜けちゃったのね……はぁぁ…。
　でも、凄いわ〇〇君…ちゃんと我慢……）

「ぁッ……!?」

しかし僕は気を抜く間を自分に与えず…アレの先端をナオリさんのお肉の間にねじ込んで
抜くのと同じくらい…ゆっくりと差し込んでいく。
あぁ、またこの気持ち良すぎる摩擦……！

抜くのに比べると抵抗の少ない挿入はスムーズだけど
ただ、敏感な先端をナオリさんの太ももと大切なところにずぅっと撫で続けられてるみたいで
股間からの快楽の伝播に大差はなかった。

どちらも全身が震えるほど気持ち良い……！

『やった、やったよ…ナオリさん……僕、僕…うはぁ…ナオリさんの身体、気持ち良いよぉ』

そうやって静かなピストン運動を繰り返し
そのたびに射精を我慢できたって実感を積み重ねるうち
自分でも想像できなかったほどの自信が身体に満ち溢れてきた。

これならいける…そう長いこともつとは思えないけどぉ……！

『ナオリさんっ……もうちょい、速くしますから…！
　僕…くぅあぁ……!? ナオリさぁん…!!』

（うん…うん、いいよ〇〇君。好きなように、して……。
　あんなに我慢するの辛そうだったのに…こんなに頑張れてるんだから。
　今回のことも、ご褒美に許してあげる。

　……悪いのはあなただけじゃないんだもの）

「はぁ…あッ……はぁ、あんン……。んッ…あぁ……〇〇君……」

ちょっとずつ腰の動きを速くしていく。

うわぁ…少し、速めただけで刺激がグッと高まって……！
か、勝手にピストンが…速まっちゃう!?

でも…！ 大丈夫……！ 今の僕なら、まだ耐えられるから…!!

次第にナオリさんの太ももの間からは
クチッ…クチッ…と湿り気のある音が聞こえだした。
僕の勃起の先からにじみ出た粘液がストッキングを濡らし始めたんだ。

股間のモノの滑りが良くなり、快感も加速度的に高まっていく。

『うはぁぁ…!? ナオリさん！ ナオリさん……!! 腰が、止まらないよぉ…ナオリさぁん…!!』

（腰使いが…凄く激しい……ッ！　さっきまでとは大違い……。
　もう、可愛い男のコなんて思ったら悪いかも。
　[redacted]でも……立派な男の人なんだね、〇〇君……）

僕は無我夢中で腰を振っている。
でも、本当に自分の意思で動かしているのかもう分からない。
下半身はすでに僕の意識や思考から離れて…性欲のまま自動的に動いてるような気もした。

そして、妙に冷静なもう一人の自分が
その腰の動きの激しさを他人事のように見下ろしている。
大したもんだ…人間っていうのはこんなにも速く腰を前後に動かせるなんて。

『はぁ…！　はっ…！　んっぐぅぅぁ……!?
　ナオリさんも…これ……！　良い!?　気持ち良い……!?』

太ももの間に出たり挿入ったりを繰り返すアレは…硬く熱く、これまでで最高に勃起してる。
ただもう、あらゆる部分が気持ち良くて、どこがどう感じているのか……。

この快感…ナオリさんにも感じて欲しいんだ…！
ナオリさんはただ僕のを挟んでくれてるだけで……良くなんか、ならないかもだけど

それでも、ナオリさんも気持ち良くなって……!!

「あッ…んん……はぁ、はぁ…♥　んぁッ…はぁ……はぁぁ…ッ」

（うん、大丈夫…私も気持ち良いよ。
　〇〇君の熱くて硬いものが…私のアソコをこすってるの。
　服越しでも…感じるわ。
　あなたの熱が私のナカにまで伝わってきて……もう、恥ずかしい）

太ももの間は僕の先走った粘液にナオリさんの汗も混ざって
どんどん湿り気を増していく。
ヌチュヌチュと嫌らしい音が響いて…濡れたストッキングは僕の勃起に絡まるようだ。

（あぁ……もうアソコ完全に濡れちゃってる。
　こんな凄いのが密着するんだもの、仕方ないでしょ？
　でも、〇〇君に気づかれたら恥ずかしいな……。
　い、挿入れられるのを想像して濡らしちゃうなんて…イヤらしい女だと思われちゃう）

僕の耳には全く届かなかったけれど
ナオリさんの大切なところを守る布の向こうからも
水気のある音が、クチュクチュともれ出し始めていた。

それは僕の勃起へ伝わる感触にほんのわずかな変化を与えただけだったし
その変化にだって快楽にまみれ熱にうかされたような僕の頭では気づけない。

でも……興奮し性欲にたかぶり…むき出しになった男の本能だけが瞬時にそれを理解した。

ナオリさんのアソコが…濡れている……と。

『ナ、ナオリさん…！　良いんだね…!?
　僕の、気持ち良いんだ!? なら、もっとっ…もっと!!』

なんでこんな言葉が口から出るのか…
ナオリさんが気持ち良いと感じているのがなぜ分かるのか……。

頭は理解できていない。理解しようとさえしていないんだ。

暴れまわる腰……股間からあふれる快感の奔流。
頭も身体も甘い毒に侵されていく。
視界にいるのはナオリさんだけだ…大好きな憧れのナオリさんだけ……。

ナオリさんの顔。ほっぺが真っ赤だ……。
口を手でおさえて声がもれないようにしてる…のかな？
良いのに…声聞かせて欲しい。

ナオリさんのおっぱい。初めて触った女の人の、おっぱい。
僕が腰を太ももに叩きつけるたびに、タプンッタプンッ…と規則的に柔らかく揺れてる。
やっぱり良いなぁ…ナオリさんのおっぱい。
大きくて、綺麗で…エッチすぎる。

ナオリさんのお尻。
ナオリさんの太もも。
腰とぶつかると小気味良い音を立てながらプルプルとお肉が弾んで、僕を迎え入れてくれる。
このお尻と太ももを撫でまわしながら腰を振れてるなんて……改めて凄いよ。

そして、ナオリさんのアソコ。

僕の、オスの本能が……股間の勃起が求めてる。
挿入れたい…と！ ナカに挿入れたいと…!!

ほんの数センチのところにナオリさんの……入口があるんだ。
そうだよ…そこに挿入れれば……ナオリさんのナカで……!!

『ナオリさん…!! 僕っ…したいよ…！
ナオリさんと……ナオリさんとちゃんと、セックスしたい!!
ナオリさんのナカに……！ 僕の、挿入れてっ……だっ、射精したい…!!』

（〇〇君……♥ そうだね。
私もするなら……ちゃんとお付き合いしてから、セックスしたいわ。
あと何年かして、まだ私のこと想ってくれてるなら…その時は……）

『あ…!? う…ぅああ!?』

射精したい…という明確な欲望を口にした途端
急激に射精感がこみ上げてきた。

気持ちや気力でどうこうできるレベルじゃない……噴火寸前の火山のように、マグマが……!?

僕の腰は、もう最後の最後の一瞬までナオリさんの感触を…気持ち良さを感じていたくて
力加減を無視した乱暴なピストンを……それがまた、射精感を高めて。

『ナオリさん！ ナオリさんっ…ナオリさん!! ナオリさん…!!』

（射精しちゃうんだね、〇〇君。
わかるよ…あなたのアレ、もうパンパンに膨らんで……。
ギュッてしてあげる……今回は私のナカじゃないけど…
太ももの間にたっぷり射精してッ）

急に狭くなったナオリさんのお肉の隙間に、勃起を数回出し挿入れしたところで……

僕はついに…限界を迎えた。

『ナオリさん…！　大好き、だあぁぁ……うぐぅぅぅ…!?』

「あン……ッ!?」

根元までねじ込んだ勃起がドクドクと痙攣したように震え、先端から熱い精液がほとばしる。

あ…う、うわぁぁぁ……!?

初体験の、何かのナカに射精する感覚。
それがこんなにも男に悦楽を与えてくれるなんて。
肉の棒は脈動を繰り返しながら…隙間の無い太ももの間に何度も精液をぶちまけた。

下半身どころか身体の中身を全部出してしまうんじゃないかと思うほどの、長い射精。
射精すたびにナオリさんの脚や腰もビクンと震えてる……。

僕の精液、感じてくれてるんだ。

「はぁぁ……ン…♥」

（こんな、長い射精……たくさん射精せたのね〇〇君、凄いわ。
　あぁ…精液が熱い……。
　私のアソコも、あなたの精液でべとべとだよ……はぁ……）

全部を射精しきり、ついに力を失った股間のモノを引き抜く。

先端から最後の精液が糸を引いて垂れた。

ああぁ…はああぁぁぁ……。

張りつめていたものが全て無くなったように
僕の身体は脱力してそのまま座り込んでしまった。

目の前にはナオリさんのお尻……ビクビクと軽く震えている。
太もものとアソコの間からは射精したばかりの大量の精液が溢れだし
ストッキングを塗らしていた。

僕はやれたんだ……写真じゃない、本物のナオリさんの身体で射精を……！

あふれる満足感、達成感や多好感……そして、疲労感。

この心地良い疲れのまま
ナオリさんと一緒に眠りにつきたい……そんな風に、思った。

本気でそうしようかと、思った……。

『ナオリさん……ぁっ……!?』

でも、そんなことは不可能だ……。
というか、そんなことしてる暇はない……っ。

そうだ、そうだ…！
ど、どうしよう……!? これ、どうすればいいんだ…!?

この状況……
まだ眠っているけど、もうすぐにでも目覚めるかもしれないナオリさん。
そのナオリさんの太ももやお尻、あとベッドにも
僕の精液がべったりと張り付いている。

ふ、拭いてどうにかなる……わけないし……！

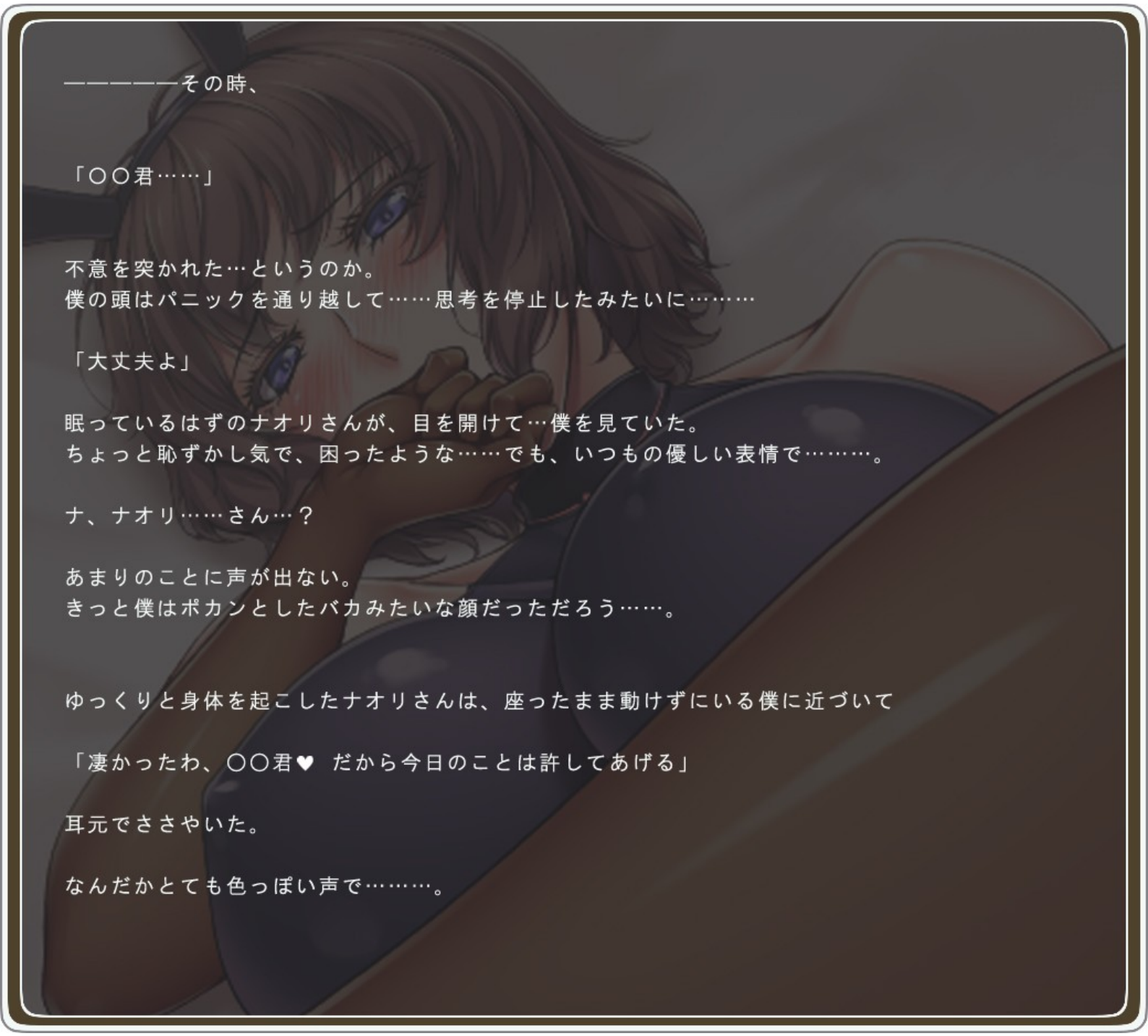
もういっそこのまま、逃げちゃえば……いや、ダメだダメだ…！
こんな状態のナオリさんを他の誰かに見られたら…ナオリさんに変な疑いが……!?

いや、もしも男の人にでも見つけられたら、そのまま襲われて……!!

ならもう…ナオリさんに、正直に謝って……。
無理だ……絶対、嫌われる……軽蔑される……ヘタをしたら僕は……。

完全に、パニックだった。
今日は生まれて初めての経験が多いけど、こんなのは体験したくなかった。

『どうしよう、どうすれば……どうしよう…ど、どうすれば……ナ、ナオリ…さん……！』



――――――その時、

「〇〇君……」

不意を突かれた…というのか。
僕の頭はパニックを通り越して……思考を停止したみたいに……

「大丈夫よ」

眠っているはずのナオリさんが、目を開けて…僕を見ていた。
ちょっと恥ずかし気で、困ったような……でも、いつもの優しい表情で……。

ナ、ナオリ……さん…？

あまりのことに声が出ない。
きっと僕はポカンとしたバカみたいな顔だっただろう……。

ゆっくりと身体を起こしたナオリさんは、座ったまま動けずにいる僕に近づいて

「凄かったわ、〇〇君♥ だから今日のことは許してあげる」

耳元でささやいた。

なんだかとても色っぽい声で……。

「でもね…これは夢なの。
　〇〇君はとっても良い夢を見てたのよ…だから……」

え……？　夢？　あ…え……ナ、ナオリさん？

ナオリさんは右手に何か光るものが握っていて、それを僕の顔に近づける……。

ガラスの小瓶……？　あの、眠り薬の…？

ベッドわきの机に置いておいた、あの小瓶が…無くなってる。

「……だから…おやすみなさい、〇〇君。
　また良い夢が見られるといいね……」

ニコリと微笑んだナオリさんは、小瓶の中身を僕の顔に吹きかけた。

特別な眠り薬……即効性で、すぐに……。

僕は…深い眠りに、落ちていく。

ナオリさんは最後まで…笑顔でいてくれた……。

【……はい、そうなんです。
『ルプス・パラディズム』のセキュリティ結界が無効化されたみたいで。

えぇ、知り合いの男の子なんですけど……普通の男の子なんです、可愛い感じの。
でも、そのコの近くだと神秘系のアイテムが効力を発動したんです。
きっと魔導系のも作動しちゃうんじゃないかと……はい、はい、私もそう思います教授。

たぶんオールキャンセラーに近い才能……血筋からくるものでしょうか？

え、あ、いえ…その……偶然気づいちゃっただけなんです。ホント偶然でッ。
何もないです、何もないから安心してください…！ はい、大丈夫ですってばッ。

『ルプス・パラディズム』から正式に大学の検査機関での調査依頼があるかもしれないので
その時はよろしくお願いします。

あと、私が個人的に調べてみたい薬があるんですが。
その……出所はちょっと詳しくは言えないんですけど…すみません。

はい、パッと見はただの睡眠薬みたいなんですが…ちょっと悪質な練り込みがありそうで。
じゃあでは、来週に……う、問題ありません、課題もちゃんと……。

教授も研究室にこもりっぱなしじゃ体に良くないですよ。
たまには外の空気を吸わないと、ランチだけでも『ルプス・パラディズム』で……
私がいても特別サービスはできないですけど。

はい、はーい……こんな時間にすみませんでした。では失礼します】

〇〇君、こんな睡眠薬どこで手に入れたのかしら。
欲しくてもどこかで買えるようなものでもないし……こういうのは規制が厳しいから。

個人的なルート……でも〇〇君に危なそうな人との付き合いがあるとも思えないし。

なんにしても〇〇君にこんな成分もはっきりしない薬を渡して使わせるように仕向けるなんて。
……まぁ、思わず私も使っちゃったんだけど。

ふふふ……寝顔はこんなにかわいいんだけどなぁ。

〇〇君今日のことは忘れて、今度は普通に会いに来てね。
前みたいに楽しくおしゃべりしましょう。

そして、いつかあなたがちゃんと大人になったその時には……。

僕的プロフィール紹介

ナオリ・R・サーピトゥエン

『ルプス・パラディズム公式ＨＰ』および『ファンクラブのＨＰ』を参考

僕が『ルプス・パラディズム』で出会った憧れの女性『ナオリ』さん。

普段は街の大学に通う現役の女子大生、年齢は２１歳。
アルバイトとして『ルプス・パラディズム』で働くお姉さんだ。

えっと……ホンモノ女子大生にしてバニーガール！ ナオリちゃんヤバすぎるだろ。
顔はもちろん良し。可愛らしさが程よく感じられる美人さんだ。
化粧も薄いし飾り気が無いところがまたポイント高いよな……だ、そうだ。

うん、ホントにキレイな人だよ。それに性格もとても優しくて、人当たりも穏やか。
きっと誰にでも好かれるタイプだと思う……もちろん男には特にかな。
モテるんだろうなぁナオリさん。誰かと付き合ってるのかな？ そんな噂は聞かないけど。
僕みたいな[redacted]じゃまだ男としても見てくれないよね…でも、いつか……。

大学では麻導医学部に在籍！ 優秀なんだなナオリさん、それに麻導の才能まで？

ん……そこらの遊んでる女子大生っぽさが無いのがたまらねぇよな。めっちゃ俺好みだ。
将来は医者を目指してて、患者とのコミュニケーション能力を高めるために
接客業でアルバイトを始めたらしいぜ、勉強の一環ってわけだな。

へ、へぇ…これが本当だったらナオリさんは女医さんに。
あんな美人でスタイルの良いお姉さんと診察室で二人きりになったら……。

公式ＨＰにはスリーサイズまで……と、とにかくスタイル抜群なんだけど
やっぱり目が行っちゃうのは、胸…だよね。凄い巨乳。

ここのバニーコスチュームは身体に密着してるから、裸じゃなくてもおっぱいが丸見え同然。
ちょっと動いただけでプルプルタプタプ揺れるんだ。
胸ばっかり見ちゃダメだと思っていても、視線はどうしても引き寄せられちゃう。

こっちにはカップサイズも書いてある……Ｈカップかぁ。
でも雑誌なんかでＨカップのグラビアアイドルを見たりするけど
ナオリさんの方がずっと大きい気がする。

それにナオリさんはおっぱいがあれだけ大きいのに身体には無駄な肉が付いてない。
お尻や太ももには程よいボリューム感があって、思わず触りたくなっちゃうよ。

う、美味そうな身体だ…なんて書きこんでる人もいる。

でも、わかるな。
ナオリさんの身体を見てるだけで湧き上がってくるこの妙な感覚。
ついこの間までは分からなかったけど、これが何なのか僕は自覚してしまったんだ。

そのせいで、僕は……。